

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 24 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520006

研究課題名（和文） 現象学的自我論の真理論的・理性論的含意—フッサールを手引きとして

研究課題名（英文） Implications of the Phenomenological Egology for the Theory of Truth and Reason: A Study based on the Husserlian Phenomenology

研究代表者

田口 茂 (TAGUCHI SHIGERU)

北海道大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：50287950

研究成果の概要（和文）：本研究では、フッサール現象学において重要な役割を果たしている「明証」概念に注目し、同じく後期フッサール現象学の重要な基盤となっている「自我」の概念とそれがどのような関係にあるのか、その関係がどのような「真理」観を示唆しているのか、について踏み込んだ考察を行った。第一に、フッサールの公刊著作ならびに研究草稿（未公開草稿を含む）を精査し、第二にその成果を分析哲学、認知科学、科学論における関連研究と突き合わせ、批判的に吟味した。

研究成果の概要（英文）：This project focused on the concept of "evidence" that plays a crucial role in Husserl's phenomenology. It was investigated in detail how evidence relates to the concept of "ego" as an important basis for his later phenomenology and what thought of "truth" is suggested by phenomenology on the basis of such a relationship between evidence and ego. This investigation was carried out through a close examination of Husserl's published works and his (partly unpublished) research manuscripts. The result of this investigation was critically evaluated by comparison with associated studies in analytic philosophy, cognitive sciences, and science studies.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	700,000	210,000	910,000
2011 年度	600,000	180,000	780,000
2012 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学

キーワード：哲学原論・各論、自我、明証、真理、現象学

1. 研究開始当初の背景

フッサールの「明証」（Evidenz）論は、彼の現象学の全体を貫く主要概念の一つである。彼の現象学がなぜ初期の非自我論的現象学から自我論的現象学へと転回を遂げねばならなかったのかという理由も、「明証」概念の一貫した展開のうちにある。研究代表者

は、この点を著書 *Das Problem des ‚Ur-Ich‘ bei Edmund Husserl. Die Frage nach der selbstverständlichen ‚Nähe‘ des Selbst* (Dordrecht: Springer, 2006) において同書の論旨に必要な範囲で示したが、明証論そのものの主眼的論究が十分ではなかったために、自我概念と明証論との繋がりは十分に明

示されるには至らなかった。一般にフッサール現象学を扱った二次文献においても、自我論と明証論の関連を詳細に論じた研究はほとんど見られない。しかし、この点はフッサールの現象学立場そのものの核心に関わるのみならず、一般に科学において重視されている客観的・実証的根拠づけに対して主観的・相対的で「一人称的」とも呼ばれる観点かどのような関係に立つのか、という点の考察にも寄与しうる重要な論点であると考えられる。この点は、「意識研究に一人称パースペクティブは必須かどうか」という点をめぐる近年の論争（*Phenomenology and the Cognitive Sciences* 誌上での D. Denett のテーマをめぐる論争など）や、分析哲学における一人称研究などにも関わってくる論点であり、現象学的な諸研究をより広い観点から批判的に吟味するためにも有益な視角であると考えられた。

2. 研究の目的

本研究は、第一にフッサールの明証論に関する公刊テキストならびに研究草稿（未公開草稿を含む）を精査し、関連する二次文献をも検討しながら、フッサール明証論の踏み込んだ統一的解釈を行うことを目的とする。その際、明証概念のもつ理性論的側面と、フッサール現象学の自我論的転回との関係、ならびに必自然的明証と現象学的自我概念との密接な関係をどのように理解できるか、という点にとりわけ焦点を当てる。

第二に、この研究を通して、「現象学的」と呼ばれる思考態度と「現実」との関係、いかにすればその真理論的含意について、自我的パースペクティブとその明証性格という観点から考察を加える。

第三に、基盤研究(C)「現象学における「理性」概念の変容——フッサールとレヴィナスに即して」（2007-2009 年度、研究代表者・田口茂）の成果を引き継ぎ、フッサールおよびレヴィナスにおける「理性」概念の変容を、「明証」概念の明確化によって一層正確に基礎づける。フッサールは、「理性」を特有の「直観」性格において捉え、それを直接に「明証」概念と接続しているからである。そのさい鍵となるのは、「現象学する自我」、すなわち哲学的に思考する者自身を表わす哲学的概念である。この概念がフッサール現象学の中で果たす独自の役割を解明することにより、現代において単純な整合性へと狭隘化される傾向にある「理性」概念を吟味し直し、その批判的再定義につながる基礎的洞察を獲得することを目指す。

第四に、以上の研究の成果を、認知科学、分析哲学、科学論における一人称パースペクティブの考察というより広いコンテキストの中で吟味し、学問研究における「一人称パ

ースペクティブ」の還元不可能性を提示するための有効な通路を探る。上記の研究によって、学問研究・科学研究の視点が三人称的パースペクティブによって汲み尽くされえないことが示されるならば、客観的整合性としての合理性を逸脱する事象次元についての研究が、それとは別の意味で依然として「合理的」であり「理性的」でありうることが示されうる。

3. 研究の方法

(1) フッサールの公刊されたテキストおよび未公開草稿に即して、明証論に関する記述を詳細に吟味し、最新の研究文献を参照しつつ、その統一的解釈を行う。

① 第一に、フッサール自身が一般に向けて執筆した明証論関係の重要テキストを綿密に検討する。『論理学研究』、『イデー I』、『形式論理学と超越論的論理学』、『デカルト的省察』、『危機』など、フッサール自身によって公刊された著作の該当部分は、解釈全体を方向づけるものとして、特に重視されねばならない。さらに、『現象学の理念』、『第一哲学』、『論理学・認識論入門』（*Husserliana* XXIV）、『哲学入門』（*Husserliana* XXXV）といった講義は、フッサールの思考がより直截かつ詳細に表現されたものとして、解釈の際の重要なよりどころとなりうる。特に最後に挙げた講義は、明証論のまとまった研究を含み、付録の研究草稿も合わせて検討するならば、その展開過程を詳細に追うことを可能にしている。また、この講義、および『第一哲学』講義においては、明証論と自我論との関わりをとりわけ明瞭に辿ることが可能となっている。これら二つの講義および関連草稿を特に綿密に検討する。

② 第二に、明証論に関するフッサールの研究草稿を綿密に検討する。研究草稿には様々な具体的分析の試みが含まれ、フッサールの思考過程を辿るにはとりわけ適している。フッサールの研究草稿は、フッサール全集に収録されたものも多数あるので、その検討が必要である。未公開草稿に関しても、これまでフッサール文庫で閲覧した未公開草稿の研究データを明証論研究という視角から一貫して精査し、現象学的思考そのものにとっての明証論の意義と、それが自我論的パースペクティブとどのように絡み合っているのか、という点に関して、詳細に検討する。

③ 第三に、以上の文献研究の成果を、明証論・真理論・自我論関係の最新のフッサール研究文献と突き合わせ、批判的に吟味する。また、国内外の会議で研究発表を行い、現象学研究者とのディスカッションを通じて、応募者の自我論解釈、明証論解釈を多様な角度から吟味していきたい。

(2)以上の点に関してある程度の見通しを得た上で、分析哲学・科学論・解釈学などの真理論解釈、ならびに「理性」「合理性」解釈を参照しつつ、現象学的な自我的パースペクティブと真理・理性との関わりについて様々な角度から吟味を行う。特に検討・参照されねばならないのは、E・レヴィナスをはじめとする現代フランスの哲学者による「理性」解釈や、分析哲学や科学論における「合理性」解釈である。この方向では、現象学的自我論・明証論・真理論の有効性を測るため、「一人称パースペクティブ」(first-person perspective)をめぐる近年の論争を取り上げる。ダニエル・デネットの提唱するhetero-phenomenology(三人称的視点からの現象学、一人称パースペクティブを排除する)の理論的内容を検討し、これをめぐる*Phenomenology and the Cognitive Sciences*誌上の論争を具体的に検討する。その他、認知科学分野において近年論じられている一人称パースペクティブの必要性・是非に関して、フッサール現象学、特にその明証論・真理論から検討を行う。一人称パースペクティブの研究は、分析哲学の流れを汲む研究者によっても、近年積極的に進められており、その試みは現象学者によってもしばしば取り上げられている。関連論考を吟味することにより、現象学的な一人称パースペクティブの解釈およびその射程を、より広い観点から多角的に検証したい。

このような方向での諸研究によって、科学研究における「合理性」概念を、「主観的なもの」との関連で再度考察し直すための手がかりを探る。

4. 研究成果

(1) 2010年度は、第一に、フッサールの著作のうち明証論関係の重要テキストを綿密に検討した。とりわけ『現象学の理念』*Die Idee der Phänomenologie*の詳細な再検討を通じて、明証論と還元論との関わりを解明するための重要な成果が得られた。要点のみを述べるならば、明証への還元が、全現象のうちの特定の明証的「領分」への還元としてではなく、「明証的であること」それ自体への還元として再解釈されていく過程を、上記テキストの展開の中に明確に辿ることができ、これによって「現象学的還元の発見」と呼ばれる転換を、明証への還元による眼差しの解放(思考が自らの主題的眼差しを遮蔽していた方法的制限から自らを自由にする)として再解釈することができた。

この成果を基盤として、明証論的・真理論的観点からみてとりわけ重要な「実在性」*Realität*および「現実性」*Wirklichkeit*の概念と自我論との関わりについて、包括的な観点から研究した。これにより、明証論的観

点からの現象学全体の再解釈への道筋、ならびに「現実」の哲学的解釈としての現象学の意義を明らかにすることができた。これらの成果については、Husserl Circle, 韓国現象学会, 日本現象学会等で発表した。

第二に、上記の成果は、科学的・学問的研究の合理性についての明証論的考察を大きく前進させた。上記の解釈を基盤として、ピート・ハット(Piet Hut)・プリンストン高等研究所教授(物理学、学際研究)、西郷甲矢人・長浜バイオ大学講師(数学)との共同研究を開始し、明証論に基づいた現象学的な現実解釈の中に科学研究の合理性をどのように位置づけることができるかについて、体系的な考察を開始した。とりわけ、科学研究が一人称的・自我論的な観点を見かけ上排除しているにもかかわらず、実際には一人称的経験を不可欠の条件の一つとしてもつことについて、現代数学ならびに物理学の最先端の知見に即して重要な洞察を得ることができた。この方面に関連して、分析哲学における外在主義と内在主義の論争、近年の「心の哲学」ならびに「認知科学」における成果についても、ある程度基本的な論点を吟味し、次年度以降の研究を準備することができた。

(2) 2011年度は、第一にフッサール現象学における明証論と自我論との関わりを、扱うテキストの範囲を広げてさらに検討した。その結果、現象学的「明証」がなぜ固定的な成果としては捉えられず、むしろ絶えず認識と思考の更なる展開への「媒体」(Medium)として捉えられねばならないのかを、いくつかの方面から明らかにすることができた。この方向では、現象学的明証論をめぐる近年の諸研究の検討、拙著が検討テキストの一つとなったフッサール研究会シンポジウムでの集中的な討論、現象学にも批判的検討を加えている田辺元の「媒介」思想の研究などがとりわけ研究の進展に資するところがあった。

第二に、2010年度に引き続き、ピート・ハット・プリンストン高等研究所教授、西郷甲矢人・長浜バイオ大学講師との共同研究を進め、これにより本研究における明証論・真理論の研究成果を科学論的方面からも具体的に検証・修正することができた。とりわけピート・ハット教授が企画者の一人となった、Center of Theological Inquiry (Princeton, アメリカ合衆国)における学際共同セミナーに招待され、多分野の科学者との共同討議に参加できたことは、本研究の成果を諸科学における知との関係で捉え直すために大いに役立った。西郷甲矢人氏とは定期的に共同研究を進め、現代数学の先端的知見(とりわけ圏論)を手がかりに、現象学的明証論および自我論の数学的含意という予想外の成果をも得ることができた。

第三に、認知科学ならびに分析哲学における「一人称」概念について、前年度に引き続き検討を進め、その研究成果の一部を St. Louis University で開催された「現象学と諸科学」をテーマとする国際学会で発表することができた。この方向ではとりわけ、認知科学における「一人称」的経験の研究の中に、現象学的明証論に基づく「原一人称性」(primal first-personhood) と「変様された一人称性」(modified first-personhood) との区別を導入することを試み、一定の成果を得ることができた。

総じて 2011 年度には、現象学的自我論と明証論を、単に現象学内部の議論によって検討するだけでなく、科学論的方面、認知科学的方面、数学的方面、媒介論的方面など、予想以上に多方面から検討することができた。とりわけ、関心を共有する他分野の研究者との共同討議により、科学論的方面をも含めた「知の一般理論」への寄与に関する現象学的明証論の研究が、予想以上に進展した。

(3) 2012 年度は、以下の三つの方面から研究を進めた。

①フッサールの明証論に関しては、関連テキストを再度精査し、いくつかの新たな知見を得た。とりわけ、『論理学研究』における「充実」論を明証論的観点から再検討し、その成果を、『受動的総合の分析』においてフッサール自身が行っている明証論的な「充実」解釈と突き合わせて、明証概念の機能的分析を進めた。このような「充実」現象の立ち上がった検討により、これまで十分にアプローチできなかった受動的総合の分析に関する明証論的視角からの解釈が可能となった。これにより、いわゆる「必自然的明証」の含意がより正確に理解可能となった。

「現実性」と「合理性」の解釈に関しては、『イデー I』、『事物と空間』等のテキストの再検討により、とりわけ世界性とプロセス的合理性の解釈に関して大きな進展があった。その成果は 2012 年 11 月にチリのサンチアゴで行われたフッサール記念学会で発表した。

②現代の認知科学を参照しつつフッサールの自我論および明証論の含意を再検討することにより、とりわけ「循環性」、「再帰性」の解釈において一定の進展があった。また、科学論とドイツ観念論の検討から独自の「媒介」概念を発展させた田辺元の哲学を、前年度に引き続き立ち入って検討した結果、フッサールの「明証」概念の解釈に格段の進展が見られた。フッサールの「明証」概念はしばしば確証プロセスを一方的に停止させるものとして非難されたが、媒介論的な観点を導入することにより、「明証」とは経験プロセスの媒介機能にその本質をもつものである

という解釈が可能であることがわかった。その成果の一部は、2013 年 4 月にコペンハーゲン大学で行われた北欧現象学会第 11 回年次大会において発表した。この方向での研究は引き続き 2013 年度から行う科学研究費補助金基盤研究 (C)「現象学の媒介論的展開——フッサールと田辺元の哲学を手引きとして」(研究代表者・田口茂)にて継続する予定である。

③昨年度までに引き続き、ピート・ハット・プリンストン高等研究所教授、西郷甲矢人・長浜バイオ大学講師との共同研究を継続し、物理学的・数学的な視角から本研究の成果に関して有益なコメントを得ることができた。この方向では、現象学的明証論の基礎的アイデアと本研究の成果に対して、より平明かつ一般性の高い表現を与えるための重要な示唆が得られた。予想外の成果としては、「原自我」概念を含む現象学的な自我論の構造がある種の数学的構造論(圏論)の言語によって明確化されうるということが具体的に明らかになったという点が挙げられる。西郷氏とは現在共著論文を執筆中である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 8 件)

- ① Shigeru TAGUCHI, Reduction to Evidence as a Liberation of Thinking: Husserl's Idea of Phenomenology and the Origin of Phenomenological Reduction, in: *Metodo. International Studies in Phenomenology and Philosophy*, 査読無, Vol. 1, No. 1, 2013, pp.1-11.
- ② 田口茂 「私」の定義としての「身代わり」——主体の唯一性と留保なき普遍性をめぐって、『現代思想』3月臨時増刊号・総特集レヴィナス, 査読無, Vol. 40-3, 2012, pp. 208-223.
- ③ 田口茂 超越論的自我論とその方法的洞察——カント・フイヒテ・心の哲学と現象学——, 『日本カント研究』 査読無, 第 12 号, 2011, pp. 107-122.
- ④ 田口茂 〈異和感〉が覚起する〈理性〉——間文化性をめぐる現象学的試論, 『現代思想』, Vol. 38-7, 2010, pp. 86-99.

[学会発表] (計 13 件)

- ① Shigeru TAGUCHI, "Annihilation" of the World? Husserl's Rehabilitation of Reality, International Colloquium: *Husserl: Perception - Affectivity - Volition*, 2012 年 11 月 15 日, Universidad Alberto Hurtado (チリ)

- ② Shigeru TAGUCHI, Reality as it is: Nishida and Tanabe on Appearance and Mediation, International Conference: *Japanese Philosophy as an Academic Discipline*, 2011年12月10日, 香港中文大学 (中国)
- ③ Shigeru TAGUCHI, Critique of Evidence in Science and Phenomenology: Layers of First-Person Givenness, *Phenomenology as a Bridge between Asia and the West* Conference 2011年5月23日, Saint Louis University (アメリカ合衆国)
- ④ Shigeru TAGUCHI, What is “Real”? Husserl’s Idealism and His Redefinition of Reality, 韓国現象学会第212回月例発表会, 2010年10月23日, ソウル国立大学 (韓国)
- ⑤ Shigeru TAGUCHI, Reduction to Evidence and its Liberating Function: Husserl’s Discovery of Reduction Reconsidered, 41st Annual Meeting of Husserl Circle, 2010年6月23日, New School for Social Research (アメリカ合衆国)

[図書] (計4件)

- ① R.バーンスタイン(著)、菅原潤、田口茂、他(訳)、『根源悪の系譜 カントからアーレントまで』法政大学出版局、2013年、pp. 254-323 (共訳)
- ② Antonio Cimino., Vincenzo Costa (ed.), Shigeru TAGUCHI 他(著), *Storia della fenomenologia*, Carocci editore, 2012年, pp. 317-329 (共著)
- ③ Tani, T. & Nitta, Y. (Ed.), Taguchi, Shigeru: Aufnahme und Antwort: Phänomenologie in Japan I (Orbis Phaenomenologicus, Perspektiven Bd.23), Königshausen & Neumann, 2011年, pp. 118-133 (共著) .

[その他]

ホームページ等

<http://researchmap.jp/read0125809>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田口 茂 (TAGUCHI SHIGERU)

北海道大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：50287950